

たまがわ5

ひろば

昭和61年7月20日 第55号 出張所 川木 五 張 700-9120

号者局 昭鈴玉 行 第 55 出 張 所 川 木 五 張 700-9120

アサカサ 瀬田

三軒前の秋、瀬田の西のはずれ東名高速用費インデに近い環八をはさんだ両側に、相次いで三軒のレストランがオープンし、わずか半年で誰いうとなく「アメリカ村」と呼ばれる様になりました。名付けた人はどなたでしょう。「アーリーアメリカンスタイル」の白い建物、低い生垣、夜ともなるとメルヘンチックな灯。歩道から店までの短い道も、若い人達にはたのしい散歩道になります。駐車場に立ち、名付けた人の気持ちがよくわかりました。

車から降りたマンツーマンのサービスに、うかがいました。「美術館の隣りで、ここがアメリカ気分になりました」と、今日は生活の臭いの少ない所を選びました。尚、昨午世田谷百景に選ばれております。近くには植木場あとしのぶ記念の碑があります。大坪 高橋

昭和五十年代以後、瀬田玉川が、東京の西の玄関として新しい役割を果たしつつあることは、幹線道路網の整備、交通機関の拡充と相俟って充分理解されることである。この地域が将来どの様に発展、変化して行くかは、正に二十一世紀への展望であり、郊外住宅地の都市化への挑戦とも言えます。



住宅地としての居住環境が一応は整えられるものの、幹線道路沿いは、やはりビジネス街化して行く事も否めない推測であります。ふさと瀬田はその様な時を迎えても古き伝統を守り、先人の伝承を大切に、残しておいて欲しいと思います。今まさに二十一世紀の夜明け、今春入学した小学校一年生が成人する頃には新しい世紀が始まっています。その時、私も夫国より『ふさと』を見ていただくことになるでしょう。その為にもふさと瀬田を、かりと記録し、後世の人に託しておきたいと考えています。

梅雨の晴れ間に思い出す、やがてお盆を迎える。この仕事を片づける。あれもこれもとお盆を目標に家族一緒に子どもまで動員して仕事を片づける。

暑くて苦しいまうち、盆休みは、ふだん食べないものを頂く。家中がゆっくりできる。盆が来、ご先祖を迎えるに、新しい竹を切り、みそはきを切り束ねる。茄子を切り、里芋の葉の上にのせる。お迎えのお馬さん、胡瓜と茄子二頭毎年見なれた事でもなつかしい。夕方になると、お寺へご先祖を迎えに、新しいゆかたを着て、ほうすき提

お盆さま

瀬田三丁目 大塚 助 三丁目 三度三度野 栗うどん そば おもち等 昔からメニューはその家によって決まっています。素朴なものはかりである。近頃は、自動車でお迎えして、角口で火を焚くのをためらうが、昔の姿が少なくなっていくのが、何か心淋しい。

古くは大塚ッ原といひ、下は根ッ子の坂となり、大山街道は、池上お会入とある道として役場に行く道で、おいら学校いった道、上野毛ッ原の入口に、深い地底の農家あり、背戸の谷戸田に挟まれて、キレイな水のさき流れ、今じゃ瀬田中、うんどうしよう

玉川神社に絵がのこる、老松がいた先生は、堅山南風と言ったッけ、玉川病院通りすぎ、慈眼寺坂を下すりや、昭和の初めのエッセイ王、吉田三郎の跡もなく、大空閣の詠歌が、ひぐれの街に消えて、た、環八道で区切られて、玉川台と名を変えた、アメリカ村を右に見る、東名道の入口で、瀬田は五叉路の軸となる、若首シヤレ族レストラン、昔玉川八景の、景色活した、行善寺、お釘きあつめた法徳寺、玉川遊園地もありました、玉川閣の名で呼ばれ、旅の芝居や浪曲の、常設小屋も消え失せて、アレからザッ、ト五十年、二四六の切通し、昔瀬田の十三世、印籠かきも今はなく、バクアベニーとなり、また、バイクの音を聞き立てて、日本の文化を突っ走る

水と川と散歩道



以前あった川も辿って行くと暗渠となっていて、昔の面影は全くない。

いらかみち
流れがありベンチがあり
赤鬼青鬼黒鬼
あなたの好きな百人一首
みつかるとな



建物のうらがわに
噴水と流れを
利用したすば
らしい庭園がある

おもいはせの路
急な坂道も沢山あ
るが みどりも多く
静かなコース

はなみず木通りは
あまりにも有名になった



作図 鈴木(堅)

郷土紹介 次大夫堀

現在、瀬田と玉川の町境を流れている「丸子川」はかつて、「次大夫堀」とか「六郷用水」と言われていた農業用水の一部で、土地の人達は「次大夫堀」を流れて「じだいほり」とも呼んでいました。

その歴史は今から約四百年前に遡る事ができます。天正十八年(一五九〇)七月、秀吉軍の小田原攻めにより北條氏が滅び、秀吉より関八州を与えられた徳川家康は江戸周辺の開発に色々と手をつけています。その一つが用水工事です。慶長二年(一五九七)家康

は元今川家の家臣小泉次大夫次郎の建議に基づき、次大夫を用水奉行にして多摩川の両岸に農業用水を開削させました。下流に向って右側には桶毛、川崎二ヶ領の灌漑を目的とした二ヶ領用水、左側には世田谷、六郷各領灌漑の為の六郷用水、いづれの用水も多摩川上流の和泉(現在の小田急和泉多摩川降橋の少し上)という附近に取水口がありました。次大夫は使役にかり出される領内農民達の負担を考えて、両用水の工事を三ヶ月交互に進め、延十五年の歳月を要して完成しました。そして今、堀の名は丸子川と変わっても、「じだいほり」と言う言葉の中に次大夫の業績を偲ぶ事ができます。(飯田)

「森の都」からの来客 瀬田三丁目 鬼頭 豊 森と音楽の都・ウィーン市に住む、元スキー教師のマックスさんと、私は昨年からエスペラント語で文通をしている。 そのマックスさん夫妻が先日、観光のため来日したので、世田谷美術館へ案内した。用賀の「壁画のみち」では二人とも小学校(東田・用賀)の児童の絵に感心していた。壁面裏下のゴミと放置自転車にはちよんと眉をひそめたようであったが……。

マックスさんは、「いらかみち」の鬼の面や石の椅子をじっくりと撮影していた。美術館前庭の、同市ドゥアラング区との姉妹都市提携

一周目記念樹「マロニエ」の前で、二人は私に思いがけないことを尋ねた。「どうして祐公園にはこんなに小鳥の数が少ないのですか?」

今回のメインテーマは、瀬田の移り変わり。 瀬田谷が「世田谷」の地名の起りと言う人もいます。 その意味では、瀬田は歴史の宝庫とも言えます。 尚「小泉じだいほり」の名前は、古文書等、過去の資料に、「次大夫」「治大夫」と使われていますが、本号では「次大夫」に統一しました。(飯田)

